広報市民リポーターだより No. 4

『車社会と交通事故』

市民リポーター　佐藤　実（天神緑町）

「車社会」ということばに象徴されるように、私たちの生活は車が無いと成り立たないといっても過言ではありません。また、車の増加にともなって、交通事故のニュースが毎日のようにマスコミに取り上げられ、大きな社会問題となっています。そこで、交通事故の現状について、大館警察署の交通課を取材しました。

後を絶たない交通事故

車社会といわれる今日、歩行者が優先か、車が優先か、皆さんはどうお考えですか。車道と歩道が区別されていない道路では、車を運転する人にとって歩行者がじゃまになるし、歩行者にとっては車がじゃまになることも事実です。二、三十年前まで荷馬車が通った道が多少広くなったとはいえ、心ない運転者が、道路交通法を無視するかのように我がもの顔で車をビュンビュン飛ばしている現状をみると、歩行者優先などとはとてもいえないような気がします。歩行者が青信号で横断歩道を渡っていても、左折する車や右折する車にはねられたり、道路を歩いていてはねられたりして死亡する例が後を絶ちません。文明の利器であるはずの車が、心ない一部の運転者のために走る凶器になっていることはとても残念です。

ピストルや刃物だけが凶器ではありません。車も走る凶器になっているということをもっとよく考えてみる必要があるのではないでしょうか。全国では、毎年一万人前後の人が交通事故で死亡しているのです。

大館警察署で取材中の佐藤リポーター（左）

先日、大館警察署の交通課で取材をしました。管内の今年の一月から八月までの交通事故状況は、発生件数二一三、死者五、傷者二六一となっています。人口約六万八千、世帯数約二万三千の大館市の車（自動二輪車除く）の登録台数は約四万台です。また、免許所有者は三万五千七百六十四人とのことでした。死亡事故の原因の中に飲酒無謀運転、シートベルトの非着用があります。シートベルトをしていれば助かったかも知れないという事故がたくさんあるとのことでした。

次に人口六万八千人あまりの大館市に四万台の車は、皆さんは多いと思いますか少ないと思いますか。大館市の四万台の車を並べるとどれぐらいの長さ（一台四・五メートルとして）になると思いますか。また、全国にある約六千万台の車を並べたらどれくらいの距離になると思いますか。時代の流れとはいえ、あまりにも車が増え過ぎたと思います。石油の九九％を輸入している日本です。車であれ食べ物であれ、私たち日本人はあまりにもぜいたくになり過ぎたと思うこのごろです。この狭い日本に約六千万台の車があるということですから、道路が混むのも当然です。

車はとても便利なものです。しかし、使い方次第で走る凶器になることも事実です。交通事故といっても、車が勝手に走るわけではなく、必ず運転者がいるわけです。この文明の利器を凶器にするかしないかは、運転者の心掛け次第です。酒を飲んだら車に乗るな、車に乗るなら酒を飲むなといわれてきましたが、どうしてこうも飲酒運転が多いのでしょうか。歩行者であれ運転者であれ、失った命は二度と戻ってこないということを忘れないでほしいものです。

時速八十キロで走行中の車が急ブレーキを掛けてから停止するまで、乾いた舗装道路で七十六メートル、雨でぬれた道路ではその一・五倍、積雪や凍結した道路では三倍以上の距離が必要だそうです。車を運転する時は、油断をせず、十分な車間距離をとることも忘れてはいけません。

車が珍しかった私の子供時代

古い話で申し訳ありませんが、私の子供のころを振り返ってみると、とにかく車が珍しくて、目にする機会は年に数回という時代でした。車社会の現在では、とても考えられないことですが本当の話なのです。町内で結婚式があってハイヤーが来ると「ハイヤーが来た、ハイヤーが来た」と言って、走って見に行ったものです。また、下校の途中、役場の隣の倉庫に米を集荷に来たトラックを飽きもせずにいつまでも見ていました。車に乗るなんぞ夢のまた夢でした。当時はガソリン車がないため、ハイヤーでもトラックでもバスでも車にかまが付いていて、木炭をたいて走っていました。しかし、なにせ馬力が小さくて、坂道まで来るとバスのお客さんが降りて押したこともあったそうです。エンジンを掛けるときは、クランク棒をエンジンの穴に入れて両手で思いっきり回すのですが、なかなか掛からなくてエンジンが掛かる様子を何十分も見ていたことを覚えています。

交通事故は交通ルールを守れば減らせるはずです。深夜や早朝は車の交通量が少ないことをよいことに暴走するなどもってのほかです。今は、そこのけそこのけお駕籠が通るといった時代ではありません。交通ルールとマナーを守り、運転者と歩行者がお互いの立場に立って、交通事故を少しでも無くすようにしていかなければなりません。